

編集後記

世情騒然たる一九九五年もすでに四分の三余りが過ぎ、山里からは紅葉の便りが伝えられる季節を迎えるようになった。

『文学読叢書』第一一〇輯をお届けする。

思えば今年は、「戦後五〇年」というジャーナリストティックな呼称と符号するかのようになり、大きな出来事が相継ぎ、幾多の問題点が指摘され続けた年であった（過去形にするにはまだ少々早い）。阪神大震災によって浮き彫りにされた都市生活の構造上の諸問題、オウム事件をめぐる破防法と宗教法人法の問題、沖縄の米兵暴行事件が露呈した日米安保の問題、等々。これら一連の事件が「戦後五〇年」という節目の年に起こったのは厳然たる事実であり、そこには確かに日本社会の戦後処理の杜撰さが顔を覗かせている。しかし、以上のことを戦後「五〇年」という数字上の区切りにことさらに関連づけることには、違和感を覚える。戦後五一年、五二年になっても同様の問題はおそらく反復されるだろうし、そもそも「戦後」を何かの起点と見なすことが、逆に物事を見えにくくしている原因なのかもしれない。

それにしても日本人は、歴史の流れに数字上の区切りをつけるのが好きなようだ。もちろん、流れを区切るることによって、過去と現在の関係や、その間に横たわる時間の重みを吟味し直す姿勢は尊重されて然るべきだろう。だが数字上の区切り

をつけることで何か問題が片づいてしまったような錯覚に陥るとしたら、そのことには警戒心を抱かなくてはなるまい。ところで、愛知大学は来年創立「五〇周年」を迎える。このことを、さて、人々はどうのように受けとめるのであろうか……。

(T)

平成七年十月十五日 印刷
平成七年十月二十日 発行

(非売品)

編者 愛知大学文学會

代表者 安本博

印刷所 豊橋市小池町 東邦印刷工業所

發行所 豊橋市町畑町 愛知大学文学會

振替 〇〇八三〇一—四五六五四